

# 小学校における総合的な学習と教科学習等との相互関連に関する研究

— 教師支援の在り方を中心に —

学校教育専攻

総合学習開発コース

野田 亮 一

指導教官 村 川 雅 弘

## 1. 問題の所在

平成10年12月に新学習指導要領が告示された直後から、学力低下キャンペーンが展開されるようになった。その批判の矛先は、新設される「総合的な学習の時間」に向けられ、総合的な学習が戦後の経験主義と同様の這い回り現象を生み、その結果、再び学力低下現象を引き起こすのではないかとの懸念が表出している。

しかし、この学力低下論争には、学力をどのようにとらえるかという問題が根底にある。21世紀を生きる子どもたちに求められている学力とは、教科の学力のみではなく、教科の学力とそれを活用する力とのバランスを考え、その両全を目指す学力である。このような考え方に立つ時、総合的な学習と教科学習等の関連に目を向けていく必要が生じてくると考える。

また、安彦忠彦(2000)は、「本来、『総合的な学習』の時間については、従来の『各教科・道徳・特別活動』の三領域とは次元を異にするもので、これらの上か下かを貫いて横断したり総合したりすることのできる学習を展開する時間として構想されている」と述べ、総合的な学習と教科学習等とが、教育課程上密接に関連すべき関係にあることを示唆している。

さらに、本来の総合学習の理念においても、デューイの教育理念に基づく経験主義教育は、決して知識の獲得を軽視していたわけではなく、「相互作用」、「再構成」という行為概念で教科

と経験とを統合するという「知」の論理を意図していたのである。このことは、活動を中心にした総合的な学習と知識を中心にした教科学習との関連の必要性にも通底する考え方である。

このようなことから、本研究では、総合的な学習と教科学習等との関連の在り方を、理論研究と実践研究をもとに明らかにする。

## 2. 研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

- ① 知識や技能等の資質・能力を総合的に活用する力を育成するために、総合的な学習と教科学習等をどのような「関連要素(何で)」と「関連方法(どのように)」でつないでいけばいいのか、さらに、それを支えるためには、どのような教師の支援が必要なのか。これらを明らかにすることを目的として理論を構築し、相互関連の考え方を活かした単元を開発する。
- ② 開発した単元の授業実践を通して、相互関連のための教師支援の在り方の妥当性について考察する。

### (2) 研究の方法

本研究は、研究Ⅰ(文献による理論研究)と研究Ⅱ(単元開発による実践研究)とで構成し、研究Ⅰの理論研究での成果を研究Ⅱの単元開発に活かして、理論研究の成果の妥当性を考察していくよう構想する。

## 3. 関連に関する研究の背景

### (1) 総合的な学習と教科学習等との関連

### ① 生活科との関連（タテ関連）

タテ関連については、生活科と総合的な学習との異同一貫性に目を向けながら、両者の関連、接続のとらえ方を整理する必要がある。

### ② 他領域との関連（ヨコ関連）

学年内で総合的な学習と教科学習等との関連指導を進めていくことである。そのためには、伝統的な基礎学力という内容知とからめて、いかに関連を図っていくのが大切である。筆者は、特に両者の相互関連の必要性を重視する。

#### (2) 相互関連のとらえ方と目的

学校で学ぶ知識や技能等が生活の中で応用され総合化される、いわゆる知の総合化を促進するために、知識や技能等の資質・能力を総合的な学習と教科学習等で双方向に総合的に応用、活用させていく力の育成を目的とする。

#### (3) 関連に関する先行研究の現状分析

現状分析から以下のことが明確になってきた。

##### ① 関連の3つのタイプ

1) 活用型（知識・技能、スキル、学び方等の資質・能力を教科学習等と総合的な学習との双方向から関連させながら育成していくタイプ）

2) 発展・深化型（教科学習等で生まれた関心・意欲や課題を発展させて総合的な学習を展開したり、逆に総合的な学習で生まれた関心・意欲や知識・技能を教科学習等につなげて学習内容の理解を深めたりしていくタイプ）

3) 融合型（総合的な学習の中で、教科学習等で身につける知識・技能の習得やスキル等の資質・能力の育成が図られ、あわせて教科学習等のねらいも達成されるタイプ）

##### ② 関連の3つのレベル

1) 指導計画レベル（年間指導計画、単元計画等に関連要素（何で）と関連方法（どのように）といった関連の位置付けを行うレベル）

2) 実践レベル（教師が日常的に関連を意識し、意図的・計画的な指導・支援を行っていく具体的な教授活動レベル）

3) 子どもの認識レベル（子どもが、教科学習等で学んだことが役立っていることを実感できているのかを見取り、後の実践に活かすレベル）

#### 4. 相互関連の実践研究に向けた具現化

ここでは、まず関連指導の全体的なとらえ方と手順について整理し、次に3つの関連レベルとからめながら、それぞれのレベルでの関連指導の手順とポイントを具体化していった。その中で、3つの関連タイプを活用した具体的な指導・支援について訪問調査からまとめた。

#### 5. 相互関連を重視した単元開発による実践

単元名：「藍住彦、I・愛(Love)・藍プロジェクト」  
対象：徳島県内公立小学校5学年 92名

本物のパンフレット作りに取り組む中で、教科で学んだ力を総合で活用したり、逆に総合で学んだ力を教科につないだりしながら、双方向の学びの役立ち感を感じ取らせていく。

#### 6. 研究のまとめ

(1) 育てたい力の面から、教科学習と総合的な学習で学んだ力を双方向から応用・活用していく力が育成され、子どもたちに学びを関連させていこうとする意識の高まりが見えてきた。

(2) 実践研究を通して、掲示物などの間接的な支援や言葉かけ等の示唆や助言という直接的な支援の有効性、妥当性が明らかになってきた。

#### 7. 今後の課題

(1) 芽生えてきた子どもたちの応用・活用させていく力を、さらに総合的に活用できる力にまで高めていくための継続的な指導が必要である。

(2) 学校全体が関連指導についての意識の高揚と見通しをもち、タテの指導体制を確立する。

#### 8. 引用・参考文献…省略